

反乱鎮圧戦略の挫折

— ケネディとベトナム戦争・一九六三年 —

松岡 完

はじめに

超大国アメリカが史上唯一の敗北を味わったのが、ベトナム戦争である。戦死者は五万八千人にのぼり、直接間接にアメリカが被った損害は九千億ドルを超えるともいわれる。しかもこの敗北は「ベトナム症候群」と呼ばれる深刻かつ広範な後遺症をもたらし、現在でもアメリカはそこから完全に回復してはいない。

この戦争は「二五年戦争」「アメリカ最長の戦争」と呼ばれることがある。一九五〇年、トルーマン (Harry S. Truman) 政権による対仏軍事援助開始・軍事援助顧問団 (Military Assistance and Advisory Group) 設置を介入の起点と見るからである。それはアイゼンハワー (Dwight D. Eisenhower) 大統領によるロ・シン・ジエム (Ngo Dinh Diem) の擁立と反共のベトナム共和国 (南ベトナム) へのてこ入れなどをへて、一九六一年、ケネディ (John F. Kennedy) に引き継がれた。その直前、一九六〇年末には民族解放戦線 (National Liberation Front) といわゆるベトコン (Viet Cong)

が結成され、南ベトナム政府への挑戦が本格化している。ケネディは一九五四年のジュネーブ協定に違反して軍事顧問を増派、南ベトナムへの支援を強化し、ベトコンを相手にゲリラ戦争の勝利をめざした。

一九六二年をつうじて、それは奏功したかに見えた。一九六三年早々、ケネディは年頭一般教書で「ベトナムでは侵略の槍先は鈍った」と誇らしげに声明している。ところがじつはこの年、南ベトナムはその軍事的な弱体ぶりを露呈してしまった。政治面でも、国内の仏教徒弾圧に端を発する危機がジエム政権を崩壊に導いた。ピユリツァー賞を受賞した『ニューヨーク・タイムズ』のビガート (Homer Bigart) 記者が命名した「ジエムと浮沈をともし」(Sink or Swim with Ngo Dinh Diem) 政策がこうして終わっていく。

マクナマラ (Robert S. McNamara) 国防長官がのちに作成を命じた秘密報告書『アメリカ対ベトナム関係 一九四五—一九六七年』(いわゆる『ペンタゴン・ペーパーズ』)も、また当時政策決定に関与した人々も、この年がきわめて重大な分水嶺だったと認めている。第一に、一九六三年二月のケネディ暗殺後、ベトナム介入がジョンソン (Lyndon B. Johnson) のもとで拡大される基礎固めが終わった時期としてである。第二に、戦争泥沼化以前にアメリカがベトナムから手を引けたのに、それをむざむざと逸した機会としてである。

本稿では、まさに「破綻の一年」と呼ぶにふさわしいこの時期を中心に、ベトナム問題へのアメリカの対応を検証し、とくに軍事面についてケネディのベトナム政策が挫折したいくつかの要因を探る。第一に、ベトナムで展開された国家建設をめぐる戦いへの対処の限界。第二に、南ベトナムを矢面に立てた形の戦争に付随する陥穽。第三に、政治と軍事のいずれに力点を置くかについてのアメリカ、とくに米軍の対応の問題点。第四に、アメリカ伝統の戦い方が内在させていた欠陥である。

一 国家建設競争の焦点

一九六〇年代初め、冷戦は舞台を發展途上地域に移し、しかも激化しつつあった。そこを舞台に、ケネディ政権は共産主義者に主導された革命の成功をなんとかしても阻止しなければならなかった。ケネディが、中南米に大規模な援助を与える「進歩のための同盟 (Alliance for Progress)」、世界各地にアメリカの青年たちを派遣する「平和部隊 (Peace Corps)」といった新機軸を打ち出したのもそのためである。

当時發展途上地域は「発酵状態」にあったと、マサチューセツ工科大学から政権入りし、ゲリラ対策の専門家を自認していた経済学者ロストウ (Wall W. Rostow) は述懐している。しかも多くの場合、國務省情報調査局長をへて極東担当次官補となったヒルズマン (Roger Hillsman, Jr.) のいう、「地下」戦争にさらされていた。建設より破壊のほうが容易なこと、統治經驗を積んだ指導者の不足、植民地主義への嫌悪などから、この戦いでは共産主義の側にかなり分があるとルメイ (Curtis E. LeMay) 空軍参謀総長は強く懸念していた。

のちに駐サイゴン代理大使、駐日大使となるジョンソン (U. Alexis Johnson) 國務次官代理は、サイゴン着任当時 (一九六四年) の南ベトナムを「この国は貧しく、政治的發展は遅れ、民族的にも宗教的にもばらばらで、一世紀に及ぶ植民地主義と一五年も続いた戦争からまだ回復の途上だった」と描写している。ケネディ政権期 (一九六一―六三年) もそれは同じだった。マクナマラ国防長官は南ベトナムが、中ソ陣営および北ベトナム (ベトナム民主共和国) がもたらす外的な脅威と、ベトナムという内からの脅威にさらされる、危険かつ重要な戦場だと述べていた。その中でアメリカは反共を国是とし、少なくとも表面きは自由と民主主義を奉じる国家を建設・維持しなければならなかったのである。

ロストウによれば、南ベトナムでは「まるで各省ごとに四〇もの違う戦争が存在しているよう」だった。イギリスのマラヤ植民地（現マレーシア）反乱鎮圧の立て役者として知られ、サイゴンでも英軍事顧問団を率いてアメリカに協力していたトンブソン（Robert G. K. Thompson）がいうように、「反乱活動が地方のあらゆる地域に蔓延していた」からである。¹⁰

元記者で、当時サイゴンの米大使館で広報分野を担当していたメクリン（John Meekin）は、この戦いの舞台が「水田と村落」にあったという。全人口のほぼ八〇九割が地方に住む農民だったからである。¹¹ だから、一九六二年末から翌年初めにかけて、大統領の要請で現地を視察したヒルズマンと国家安全保障会議（NSC）の一員フォレストル（Michael V. Forrestal）が断言したように、彼らの態度こそが「戦争全体の基本問題」だった。「地方で物理的な安全が確保できれば、政府には彼らを守る力があるのだと農民に納得させるうえで必要な条件をおのずと満たすことになるはず」だと、一九六三年四月の『国家情報報告』も論じた。ところが中央情報局（CIA）の報告では、現実にはその農民こそが「ベトコンの軍事組織を支える主要な存在」となっていた。¹²

この「本質的には革命の混沌の中から国家を建設する闘い」¹³を勝ち抜くべく、ケネディ政権が編み出したのが「反乱鎮圧（Counterinsurgency）」戦略である（特殊戦争 [Special Warfare] と呼ばれる）。軍事的にゲリラを制圧するだけでなく、政治・経済・社会・心理的手段などを駆使し、政府が国民の支持を得ることによって、自衛可能な、自立した国家を建設しようとするもので、主として中南米や東南アジア、アフリカが念頭に置かれていた。

ベトナムはケネディの側近ソレンセン（Theodore C. Sorensen）がいうように、冷戦の「闘鶏場」¹⁴だった。それはとりもなおさず、国家建設をめざす二つの政治戦争が衝突する舞台であることを意味していた。ほかならぬケネディ自身、この戦いが政治戦争であることを十二分に理解していたと、彼の側近たちは異口同音にいう。その背景には、

一九六一年のキューバ侵攻失敗（ピッグズ湾事件）以来、ケネディが「軍事的解決策、軍事的進言にほとんど信頼を置いていなかった」ことがある。¹⁵

敵である民族解放戦線もこれが政治戦争だと認識しており、事実上「最優先」扱いをしていた。兵士たちには徹底した政治教育が施され、彼らは農民を離反させないよう厳しい規律のもとに行動していた。¹⁶とくに重要だったのが土地改革である。ジェム政権が土地改革に失敗したこともあって、農民たちは、苛酷な地主による支配がなく、土地が手に入り、税金も安い解放戦線の支配地域（解放区）に住むほうを好んでいたという。実際に解放戦線は一九六三年春の時点で、南ベトナム四四省のうち四二で徴税を行っていた。¹⁷彼らはさらに農民の生活改善を支援し、彼らの貧富の差や独裁への不満などを利用し、「政治技術によって軍事的勝利を達成」しつつあった。¹⁸

この政治戦争の「鍵」として、華々しく打ち出されたのが戦略村計画「(Strategic Hamlet Program)」である。それは「政府が人々に手を差し伸べるといふきわめて重要な努力の、おそらく最大の要因」だとテイラー (Maxwell D. Taylor) 統合参謀本部 (JCS) 議長は述べている。¹⁹

この計画は、イギリスによるマラヤの反乱制圧や、一九五〇年代末に南ベトナムで試され失敗した住民移住計画「アグロビル (Agroville)」などの経験から生まれたものだった。全土に分散して住む約一二〇〇万人ほどの農民を、一万あまりの小村落に移住させる。彼らに鉄条網や壕、小火器や通信機などの自衛手段を供給し、身分証明書を発行して村内への出入りを管理する。さまざまな行政サービスの提供によって生活水準の向上をもたらし、政府への信頼と支持を確立する。²⁰

トンブソンによれば、戦略村の基本目的は「物理的にも政治的にも叛徒を民衆から孤立させること」にあった。具体的には、暗躍するゲリラから民衆を保護し、彼らと政府のつながりを強化し、村落内部の社会・経済・政治的な改

革を行うことである。ゲリラ戦争ではしばしば民衆が水、ゲリラが魚にたとえられるが、戦略村によって「ベトコン」という魚のいる水を干上がらせる」(メクリン)ことが可能なはずだった。それは明確な前線が存在しないこの種の戦争に、人為的に前線を創り出す試みだったといわれる。²²⁾

加えてそれは農民と政府の間に「新たな政治的関係の基礎を築く」手だてとして期待された。戦略村とはまさに「社会的経済的実験」だったのだと、ベトナム報道でピュリツァー賞を獲得するAP通信記者(のちにCNN記者として湾岸戦争報道でも名を馳せた)アーネット(Peter Arnett)は述べている。ベトコンの脅威にさらされる人々に無私な立場から救いの手を差し伸べ、近代化と民主化という恩恵を彼らに与えることが、アメリカ人、とくにケネディ政権のメンタリテイに合致していたと指摘されている。²³⁾

一九六二年二月の計画開始から一年後には約五千の戦略村に七〇〇万人、地方人口のほぼ六割が居住していた。八月末までに戦略村の総数は八千を超え、地方人口の四分の三、九五六万人を呑みこんでいた。²⁴⁾もともと、こうした数字そのものにはかなりの水増しがあり、さらにいえば戦略村の数や政府支配下にある村落の数などは「まったくの虚偽」だったとヒルズマンは述べている。ベトナムで地方開発などを担当し、戦略村計画も手がけたフィリップス(Rufus C. Phillips)によれば、政府が挙げる数字と、本当に安全な、まともな戦略村の数の間には「はつきりとした相違」があった。²⁵⁾

だが当時、サイゴンからワシントンへの報告を見る限り、「政府とベトコンの間で展開されている競争」(ヒルズマン)は順風満帆に進んでいた。一九六三年四月、ラスク(Dean Rusk) 国務長官はニューヨークで『ベトナムに賭けられているもの(The Stake in Viet-Nam)』と題する演説を行い、「共産主義者はもはや……農民の海を泳ぐ魚ではない。一つ一つの茂みはもはや彼らの仲間ではない。彼らはしだいに飢えつつある。ベトナムの農民にとって彼らはし

だいに勝者とは見えなくなりつつある」と豪語した。七月初め、戦略村計画は「ベトナム政府による包括的な反乱鎮圧遂行の焦点」となり、従来政府の統治に必ずしも従順でなかった山岳民族さえも自発的に山を降り、戦略村に救いを求めるようになったと報告されている。²⁶

戦略村は、それまで民族解放戦線が地道に築き上げてきた農村での政治工作をいったん無に帰させたといわれる。この計画によってジエム政権は初めて戦局の主導権を取り戻し、地方での共産主義者の潮流を止めたようだった。一九六三年五月、いわゆる仏教徒危機が始まった時点では「戦略村計画はあらゆる点から見て、地方で共産側からイニシアチブを奪い、全力をあげて進行していた。共産側は……農村の真空地帯を埋める競争ではもはや勝っているとは思われなかった」と、当時極東全域でCIAによる工作を統轄し、のちに長官もつとめたコルビー(William E. Colby)は述懐する。サイゴンで仏教徒と政府が衝突を繰り返したこの年夏にいたっても、戦略村計画は「堅実な進歩」をおさめつつあるとCIAは報告していた。²⁷

しかし一九六三年秋、ジエム大統領の弟で、秘密警察や与党カンラオ(Can Lao)などを牛耳る実力者ニュー(Ngo Dinh Nhu)がトンプソンを戦略村「計画の父」と賞賛したとき、トンプソンはこう答えたという。「こんな子供たちを認知したことはない」。戦略村計画はそれほどの失敗だった。²⁸

すでにその一年近く前、ヒルズマンとフォレストルの目には、四千にのぼる戦略村の多くは「竹のフェンス以上のものではない」と映っていた。CIAの情報分析官クーパー(Chester L. Cooper)がある戦略村を視察した際、誰一人村内に泊まることを彼に勧めなかった。たとえそうしようとしても同宿してくれそうな省長はまったくいなかったという。²⁹

戦略村自衛のために武器を供給すれば、そのままベトコンの手に渡るのが関の山だったと、北ベトナムや民族解放

戦線の取材で知られたオーストラリア人記者バーチェット (Wilfred Burchett) はいう。だから戦略村を守ろうとすればわざわざ政府軍を貼りつけねばならず、経費や手間に引き合わない「厄介な存在」(アーネット)と化した。ある外国人の目に「有刺鉄線」を用いた支配と映ったものは、ゲリラの「竹」による支配の前に敗れ去ろうとしていた。³⁰⁾多くの省で状況は深刻なままであり、とりわけ肥沃なメコン・デルタではおおむね「進捗と見えるものはないという幻想」だったとフィリップスはみずからの失敗を認めている。一九六三年秋、現地を視察した国務省極東局のメンデンホール (Joseph A. Mendenhall) はトルーハート (William C. Trueheart) 代理大使から、メコン・デルタの戦略村が「滅茶苦茶」だと聞かされた。のちにベトナム戦争報道でピューリッツァー賞を受ける『ニューヨーク・タイムズ』のハルバースタム (David Halberstam) 記者は、メコン・デルタに「戦略村計画と呼べるようなものは存在しなかった」と述べている。だがそれが本当に判明するのは、ジエム政権が倒れた後のことだった。³¹⁾

南ベトナム軍の訓練を支援するオーストラリア軍事使節団のセロング (Francis Serong) 大佐が、ワシントンに組織された反乱鎮圧対策特別委員会で語ったところによれば、戦略村計画は「史上最大規模の人口移動の一つ」と呼ぶべき野心的な試みだった。だがそれは政府による強制移住あつてのことだった。

ノルディング (Frederick E. Nolting, Jr.) 駐サイゴン大使は、自分は強制移住の証拠など見たことがない、かりにあつたとしても「ほんのわずかな程度」だったと述べている。³²⁾しかしこれほど実態と乖離した言葉もなかった。ケネディの特別補佐官となった歴史学者シュレジンガー (Arthur M. Schlesinger, Jr.) は戦略村について「農民たちが時には銃剣を突きつけられて閉いの中に入れられ、そこで強制労働をさせられている刑務所同然の陰気な」場所だったと述懐している。彼らを追い立てるために砲撃さえ用いられた。³³⁾しかも戦略村の建設資金は官吏の懐を潤すのが常だった。彼らは建築資材などを法外な値で農民に売りつけていたという。³⁴⁾

戦略村の多くはこうして記者たちに「ヴェトコン支援に目覚めた農民たちの臨時キャンプ」「高価な収容所」と描写されるもの変わった。³⁵「多くの地域で戦略村は、ベトコンに対抗する新たな希望ではなく、政府の圧政の象徴となつてしまった」とメクリンはいう。だからベトコンが戦略村を攻撃し始めたとき、「ロビン・フッドのようにみえたのも不思議ではない」と、ある高官はハルバースタムに語っている。³⁶

戦略村計画の考案に貢献したイギリス人のゲリラ戦専門家トンプソンはワシントンを訪れた際、「あまりに多くを、あまりに急ぎすぎる」こと、つまり手の抜けすぎに「最大の危険」が存在していると警告した。³⁷ 布や紙に油の染みが拡がるように、じよじよに安全な地域を拡大しなければならなかったのである。これが「油染み (spot of oil) ないし oil blot」理論である。³⁸ トンプソンはジエムに一九六三年九月、戦略村計画が「迅速に行われすぎており、その結果努力を分散させ、あまりに広範な地域に〔戦略〕村が散在している」と戒めた。しかしジエムが行ったのはまさにその逆だった。彼自身の言葉によれば、速度を緩めればそれだけ敵に戦略村を破壊する時間的余裕を与えるからである。こうしたやり方が戦略村を脆弱にし、計画全体が失敗する原因となつたと、『ペンタゴン・ペーパーズ』はのちに分析している。³⁹

戦略村計画の「設計者」とも「父」ともみなされたのが、事実上政府の実権をかなり握っていたニューである。⁴⁰ たしかにアメリカ側の期待どおり、ニューの「精力的な支援」が重要な役割を演じたことは否定できない。だがニューは政府の支配を地方で強化すべく、計画の全体像や各地の実情などお構いなしに「全土をいちどきに『戦略村』で覆い尽くす」のに余念がなかつたのである。⁴¹

しかも現場に立つ官吏たちは三日間の講座を受けただけで、計画をまるで理解していなかつた。彼らは成績を上げるためひたすら農民を追い立てるか、粉飾した数字をサイゴンに送つた。ニューが計画推進を委ねたファン・ゴク・

タオ (Pham Ngoc Thao) 大佐は、中央政府がひたすら自分たちを急かしたのだという⁴²⁾。ところがじつはこの人物は解放戦線のために活動していた。だから彼は南ベトナムの混乱を助長し、政府と農民の離反を促すため故意に計画を急がせたのだといわれる。とすればその目論見はまさに凶に当たったことになる⁴³⁾。

より重要なのは、アメリカ側がマラヤでうまくいった計画をそのままベトナムに持ち込んだこと、しかもこの構想そのものに疑問を投げかけなかったことである。「概念それじたいは素晴らしいものであるにもかかわらず、概念についての理解の欠如と、それを現実化するのに十分な意欲の欠如が、計画の実施面において重大な阻害要因となっている」とフィリップスは述べている⁴⁴⁾。

米軍事援助司令部 (Military Assistance Command, Vietnam) のハーキンス (Paul D. Harkins) 司令官は、のちになっても、要するに「ベトナム人は政府というものをあまり好きではないのだ⁴⁵⁾」と片づけていた。アメリカは、失敗を正面から認められないほどこの計画に賭けていたということかもしれない。さもなければ、ジェム政権のやり方がりが槍玉に挙げられた。その結果、ジェム政権崩壊以後も同じ考え方が堅持されることになった。ジョンソン政権のもとで早くも一九六四年初頭、戦略村は「新生活村 (New Life Hamlet)」と名を変えて再びベトナムに登場する。だがハンプリー (Hubert H. Humphrey) 副大統領が「ワイシャツ姿の戦争」と呼んだものは、戦略村計画と同様、惨めな失敗に終わるのである⁴⁶⁾。

二 代理戦争が直面した壁

アメリカのベトナム介入史上決定的な年となる一九六三年は、サイゴンの南西約五〇キロの小集落、アプ・バック

(Ap Bac) からの悲報で明けた。それまで米軍事顧問たちは、神出鬼没のゲリラに手を焼き、彼らと正面から戦える日が来るのを待ち望んでいた。一月二日、その機会がついに訪れた。ベトコン部隊集結の情報を得た南ベトナム政府軍 (ARVN) が攻撃作戦を敢行したのである。彼らは装甲兵員輸送車、大砲、ヘリコプター、戦闘爆撃機などの支援を受け、圧倒的な数的優位にあった。⁴⁷

ところが無電を傍受されていた政府軍は、ものの見事に待ち伏せ攻撃を食らう。最初から最後まで戦いの主導権は敵にとられた。政府軍将兵はほとんど泥田に身を伏せたまま、犠牲を増すばかりだった。この戦いについて聞かれた米軍事顧問バン (John Paul Vann) 中佐は、「みじめな出来具合だ。いつものようにね」と親しい記者に漏らしている。⁴⁸ヘリで水田の真ん中に降り立った部隊は、まるでカーニバルの射的の目標だった。また、別の部隊は敵の退路を断つべく村の東側に降りるはずが西側に到着し、何の貢献もできなかった。ハーキンス司令官は、敵が逃走したのだから勝利だったと強弁したが、実際は政府軍はまさに「こっぴどくやつつけられた」(ヒルズマン) のである。⁴⁹

この「ベトナムでの爆発音」はサイゴンだけでなくワシントンに共鳴現象を生み、「アップ・バックのトラウマ」を生み出したとクーパーはいう。それまでワシントンは楽観的な空気に包まれていたからである。ところが突然、ベトナムの戦況が「新聞の一面でとり上げられ、テレビでも夜のニュースショーでドラマ仕立てで放映されるようになった」と、UPI通信のシーハン (Neil Sheehan) 記者(のちにピューリッター賞を受けた) は述懐する。まさに「寝耳に水」(ハルバースタム) の出来事だった。⁵⁰

直後の統合参謀本部の報告によれば、ベトコンの戦死者は一〇一人。政府軍の戦死者は六五人、戦傷者は一〇〇人。米軍事顧問も三人が戦死、八人が負傷した。虎の子のヘリコプターも五機が失われ、三機に損害が出た。「南ベトナム戦争で最も犠牲と損害の多い戦闘の一つ」となったのである。⁵¹ワシントンでベトナム対策省庁調整委員会の長を

つとめたカッテンバーグ (Paul M. Kattenburg) によればそれは、「ベトコン・ゲリラが第二次インドシナ戦争 (ベトナム戦争) で得た初めての大規模な軍事的勝利」だった。これを機に、メコン・デルタの住民の多くが公然と民族解放戦線を支援するようになり、全土で解放戦線に身を投じる者も増えた。⁵²

アプ・バックの敗北は、反乱鎮圧の担い手であるはずの南ベトナム政府軍がいかに頼りにならないかをあらわにし、この戦略の破綻、少なくとも限界を示した。⁵³ ゲリラが相手の場合、正規兵は一〇ないし二〇対一の比率が必要だといわれる。⁵⁴ ゲリラの実数把握は困難をきわめたが、一九六三年初めにはほぼ二万三〇〇〇万人程度と見積もられた。同じ頃、政府軍の総兵力は四〇万人近かった (正規軍がほぼ二一万人、民兵が一七万人あまり)。⁵⁵ 南ベトナムの経済力からすれば大きすぎるほどの規模だったともいわれる。ところが作戦指揮の誤りから、戦場には実際必要とされる兵力の半分の一し三分の一ほどしか向けられないことが多かった。⁵⁶ くわえてテイラー統合参謀本部議長が述べたように、本当に戦力となる士官・下士官の不足という問題もあった。しかも一九六三年をつうじて、政府軍の損害は上昇し続ける。⁵⁷

シーハン兵士の練度について、「もし戦争が起こっていないなければ十分だったかも知れない」と述べた。小銃やカービン銃の照準を目標に合わせられる兵士さえわずかだったからである。「政府が式典を演出できる程度に戦争のやり方を学んでいたら、ベトコンは何年も前に滅ぼされていただろう」とメクリンも嘆息している。⁵⁸

武器も不足していた。かなりの部分が「ベトナムの兵站部で失われていた」からである。政府の存在と威信を誇示したい一心から、ジエム大統領はベトコン支配地域で政府軍拠点の死守を命じた。だがそこがそのまま「ベトコンの酒保」(メクリン) と化していた。⁵⁹ サイゴンのタクシー運転手が月四〇ドルを稼いでいたのに、兵士の月給は一五ドルほど。だから彼らは市場で弾薬を売り払い、生活の足しにしていたのである。⁶⁰ アメリカが南ベトナムの軍事的

増強を図った「唯一の具体的成果」とは、ベトコンがより高度な兵器を手にするようになったことだとハルバースタムはいう。一九六四年のことが、抗仏・抗米戦争を率いたことで知られる北ベトナムのポー・ゲン・ザップ（*Nguyen Giap*）将軍は、この「アメリカ製武器の補給係と補給施設」の恩恵に謝意を表している。⁶¹

作戦行動を支えるはずの地図は、一九五四年当時フランス軍が使っていたもの。行動の基礎となる状況報告は数週間前のもの。ゲリラの情報は手に入らず、逆に政府軍の情報は敵に筒抜けだった。政府内のあらゆる組織に解放戦線の情報員が巣くっていたからである。⁶²一九六二年夏のことだが、政府軍は一〇回の出動のうち九回は敵を発見できなとニューはおかんむりだった。政府軍が主導権を發揮しようにも、ベトコンの基地がどこにあるかさえわからなかったからである。⁶³

政府軍兵士は「ゲリラと一対一で戦う危険に替えて」おり、大部分の時間「休憩」していた。夜戦などとうてい無理だった。たとえ夜間に出動しても、基地「付近の土手でうたた寝をする」のがせいぜいだった。だから暗くなればベトコンは自由に動きまわり、好きなのところを攻撃できた。窮地に立った政府軍部隊が応援を要請しても、空が明るむまでは何も来なかった。⁶⁴

それでも基地から外に出るだけでしたたかもしれない。一九六三年春頃になると「戦争は停止したかのようだった。政府軍はまったく行動を起こさなくなった」とハルバースタムは述べている。多くの部隊は防御陣地に引きこもったままだった。それは「マジノ線（Magino Line）」的な考え方に固執し「地上の長い壁」構築を試みるジエム政権のせいでもあった。⁶⁵また、何度かクーデター未遂事件を経験していたジエムが、許可なしに一定規模以上の部隊の移動を認めなかったから、臨機応変の対応など望むべくもなかった。政府軍は「サイゴンの、そしてとりわけジエムとニューの親指で押さえつけられており、何もできなかった」とクーバーは回顧する。⁶⁷

一九六三年夏に現地情勢を目の当たりにしたカッテンバーグはのちに、当時の政府軍を「嫌々ながらの軍隊」と呼んでいる。彼らが「おおむね無能であり、腐敗していた」からである。軍事援助顧問団のロウニー (Edward L. Rowny) 少将によれば、彼らは「心底から敵ともみ合いなどしたくないし、十分に安全でいたいと願っており、本気の戦闘などまったくしたくない」ことを隠さなかった。しかもジェムはみずからの面子を失うことを恐れ、激戦の末に多くの損害を出した指揮官を叱責し、ときに解任し、各部隊に攻勢を戒めた。⁶⁸⁾

戦場に出現したのは茶番劇そのものだった。政府軍が「戦闘を避ける巧妙な方法を開発」(メクリン) していたからである。敵のスパイが事前に攻撃を察知できるよう、作戦開始前にひたすら命令確認の作業を繰り返す。行軍中は声高な話し声や不必要な発砲で政府軍の存在を周囲に知らせる。まず敵の逃げ道を用意し、砲撃で政府軍の到来を予告してから行動する。ペトコンがいなくなつてから進撃に取りかかる。敵がいないと判明している場所に攻撃をしかける。要するに、「唯一の問題」は、「戦争に勝っていない」ということ、それ以上に戦争が「戦われてさえない」ということだったとハルバースタムはいう。⁶⁹⁾

だがそのほうがよかつたかもしれない。政府軍が作戦行動をとると、「ペトコンの場合と比べても、民衆との関係により大きな害をもたらずが多かつた」(メクリン) からである。兵士たちは作戦中に農村から鶏、家鴨、コメなどを盗み、農民の怒りを買っていた(ただしペトコンの報復を恐れ、政府軍に協力したのではなく「盗まれた」こととする場合もあったという⁷¹⁾)。一九六三年秋、ロッジ (Henry Cabot Lodge, Jr.) 大使は、ジェム政権による仏教徒弾圧の影響もあつて「兵士たちがしだいに攻撃性を失い、人々が戦争遂行にますます反感してくれなくなる」傾向が見られると懸念している。⁷²⁾

一九六三年の一年間で、三万二千人が部隊から脱走した。若者、とくに農民の息子たちは徴兵されて遠隔地に追ひ

やられるのを嫌い、むしろ解放戦線に加わるほうを選んだ。徴兵逃れのために指を切断する若者さえいたという。⁷³また将校たちの間にも「非常な不満⁷⁴」が感じられていた。ジエム体制への忠誠心だけで昇進が左右され、無能な者が司令官になることがしばしばだったからである。それどころか下手に武勲をおさめれば経歴に傷がつく恐れがあった。有能さゆえに部下の信望を集めれば、忠誠心を疑われ、すぐに異動させられた。ベトナムの一等乗客は將軍や大佐ばかりだという冗談があったほどである。⁷⁵

軍首脳の間にもジエムへの不満は鬱積していた。ジエムやニューが彼らに無断で、気まぐれに部隊を移動させていたからである。またジエムやニューは、宮殿から各部隊の指揮官や各省長まで直通の無線電話を設け、あらゆる部隊に監視の目を光らせるとともに、彼らの分断を図っていた。小隊以上のすべての組織にカンラオ党員や心理戦争の要員が張りついていたりパーチエツト⁷⁶という⁷⁷軍に背かれる可能性を懸念するジエムが、戦闘面の効率を、そして「反乱鎮圧の努力の効率全体」を損なっていることにアメリカ側も困惑を隠せなかった。⁷⁸

さらに大きな問題は、ベトナムで行われている「小部隊による戦争」に政府軍がまったく適応できないところにあった。「陸軍は、小部隊による行動や情報収集に比べると、大規模な行動と火砲および空軍力の活用⁷⁹に力点を置きすぎている」と、一九六二年末にヒルズマンはハリマン (W. Averell Harriman) 極東担当國務次官補 (のち政治担当國務次官) らに報告している。⁸⁰

太平洋軍司令部 (CINCPAC) が報告したように、戦闘を行う場合でも、政府軍はもっぱらベトナムの主力部隊への直接打撃を目標とする作戦を実施していた。のちに「索敵撃滅 (search and destroy)」戦略として知られるものの原型である。だが政府の力を誇示しようと、この種の作戦を行えば行うほど農民の被害が増大した。その結果、メクリンによればもともと政府に好意的だった者でさえベトナムに傾斜するようになった。並みいる將軍たちの誰一

人「ゲリラ戦争の本質を理解しているようにには見えなかった」とコルビーはいう。⁸⁰

一九六三年初め、「政治⇨軍事両面の『掃討確保 (clear and hold)』作戦」が「心強い」結果をおさめていると報告されている。だが四月になってもヒルズマンは、大規模な戦闘の追求ではなく、掃討確保作戦と警察力の活用によって、安全な地域をじよじよに拡大すべきだとラスク國務長官に訴えなければならなかった。政府軍は相変わらず敵主力部隊を追いかけてばかりで、その間にベトコンは着々と村落内部に力を築いていた。⁸¹

メクリンは、掃討確保作戦は「最初こそうまくいったのだが、たいてい崩壊してしまった。それは運営のまずさや官吏の腐敗のため、あるいは軍が約束した治安確保に失敗したためだった」と述べている。ワシントンはゲリラとの戦い方を十分理解していたのだが、南ベトナム政府軍が通常戦争的な作戦に依存しすぎたのだとする者もいる。

だが実際にはアメリカがそうさせたのである。ヒルズマンは早くも一九六三年初め、軍が敵兵力の一掃をめざすやり方にあまりに依存している印象を受けていた。⁸²

たとえばこの戦いでは民兵や警察が重要な役割を担うはずだったが、まさにそれらが南ベトナム防衛の最も脆弱な部分となっていた。民兵は政府軍の管轄下に置かれ、ゲリラ戦争にはそぐわない、通常戦争的な戦略にもとづいて訓練が施されており、しかもその訓練や装備じたいが不十分だった。彼らの軽視はその後も続き、それが「作戦上の最大の誤りの一つ」だったと、のちに平定作戦 (pacification) の責任者となるローマー (Robert W. Komer) は回顧する。⁸³

CIAがベトナム⇨ラオス国境付近の山岳民族を組織化した民間不正規防衛グループ (Civilian Irregular Defense Group) は一九六二年に軍事援助司令部の管轄となり、やはり正規軍による在来的な戦争のやり方が導入された。⁸⁴皮肉なことに、北ベトナム正規軍にも同じ傾向があり、彼らは南で展開されているゲリラ戦争にはまったく不向きだっ

たという。⁸⁵

しかしヘリ、大砲、装甲兵員輸送車などで南ベトナム政府軍の「筋肉増強」(メクリン)を促してきたのは、ほかならぬアメリカだった。⁸⁶ ケネディ政権発足以前から、「局地的規模でのゲリラ戦争」に対処するのに必要な兵力ではなく「通常兵力の建設」が優先されてきたと、マクナマラ長官のもとでベトナム政策形成に参与したバンディ (William P. Bundy) 国防次官補代理はのちに述べている。⁸⁷ 一九五〇年代以降一貫して米軍事援助顧問団は、北からの侵略、つまり朝鮮戦争型の戦いに備えて政府軍を強化してきたからである。⁸⁸

アプ・バックの敗戦は、政府軍を「まず効果的なプロの軍隊に変える」必要をアメリカに痛感させたとクーパーは回顧する。とくにベトナムに「欠けている最も重大なもの」として着目されたのが「包括的な計画」である。そこでハーキンス司令官のいう「真の全国的努力」が必要となった。⁸⁹ 「南ベトナム総合計画 (Comprehensive Plan for South Vietnam)」および「全国作戦計画 (National Campaign Plan)」がこうして登場した。それは一九六五年までの勝利を目標に「一元化した政治・経済・軍事作戦の実施という概念」を具現化したものだったとテイラー統合参謀本部議長は回顧する。この計画にもとづいて、「空軍の一部を除いて、全員を訓練する」(ハーキンス)はずだった。⁹⁰

だが結局それは、政府軍をほぼ四六万人に増強する程度の策に終始した。⁹¹ 政府軍の質的な改善はきわめて緩慢だったし、彼らが反乱鎮圧戦略を担えるほどの能力を持つことはなかった。苛立つ米軍事顧問たちはじょじょに「脇にといている。俺が自分でやってやる」(クーパー)という態度をあらさまに示すようになる。こうして戦争のアメリカ化は、ワシントンの政策決定者や軍首脳の間でも、そしてベトナムの戦場でも、着実に進んでいくのである。⁹²

三 政治と軍事の相克

ホイラー (Earle G. Wheeler) 陸軍参謀総長は一九六二年秋、「一部では、東南アジアにおける問題は軍事的というより主として政治的、経済的なものだ」という論調が流行っている。だが私は賛成しない。ベトナムの問題の本質は軍事的なものである」と断言した。ケネディ政権の方針に真つ向から反対したのである。⁹⁸

ところが同じ人物が翌年初めには、「この戦いは古典的なゲリラ戦争であり、ここでは軍事・政治・経済面の努力が組み合わさっている」と述べている。同じ頃、ハーキンス司令官はベトナムが「米軍にとって対ゲリラ戦術の実験の舞台となった」とし、ジェム大統領に対しても「軍事的努力は戦いの半分ではない」と訴えた。どうやらケネディ政権発足以来、新しい戦争への適応をめざして行われてきた教育的努力が実を結びつつあるように見えた。⁹⁹

たしかに大使館や軍事援助司令部などは、この種の戦争が支配する領土の多寡ではなく民衆の支持を競いあうものだとして論じていた。だがその多くは「リップサービス」にすぎなかったとメクリンは述べている。ハーキンスを筆頭に「米軍部は農村での政治闘争を行おうというCIAの構想に耳を貸さなかった」とコルビーも批判している。『ベトナム・ペーパーズ』によれば、現場の米軍事顧問たちもおおむね、これが政治戦争だという議論に強い反発を示していた。彼らは勝手気ままに「撃ち合いの戦争」を行い、「反乱鎮圧」概念の政治的側面などすっかり忘れ去っていた¹⁰⁰とヒルズマンはいう。

しかし、軍事を政治に優先させる傾向は、ベトナムでの戦い方にすでに決定的な影響を及ぼしていた。米軍は反乱鎮圧戦略にもとづく自己変革を、形ばかりのもの以上は拒んだ。彼らはベトナムの実情など無視して、第二次世界大戦や朝鮮戦争のような通常戦争的な対処、すなわち大規模な作戦による敵兵力の殲滅に終始したのである。「対ゲリ

ラ戦術は教えられたが、無視された」とソレンセンは述懐する。⁹⁶ 対ゲリラ戦の担い手として鳴り物入りで投入された米特殊部隊（グリーン・ベレー）は軍内部では「ケネディ夫人の小銃隊」と揶揄され、一九六三年末の段階では一〇〇人程度に減らされてしまった。⁹⁷ ベトナムでは、ハーキンス司令官が生涯を通常戦争の中で過ごした経験から、この「アメリカ式戦争」を推進していた。⁹⁸

ケネディ自身、それを知らなかったわけではない。側近に向かって彼は、「國務省も国防省もみな、ベトナムにおけるわが国の役割は軍事的でなく政治的でなければならぬことを忘れてるようだ」と不満を漏らしていたという。大統領の弟で司法長官のロバート（Robert F. Kennedy）もの中に、「われわれの行動の政治的次元については誰もが知っているようだが、それが必要な優先扱いはされないことがしばしばだった」と反省している。⁹⁹ たしかにワシントンでは中国の毛沢東やキューバ革命を成功させたゲバラ（Ernesto Che Guevara）、北ベトナムのザップ將軍らの著作が飛ぶように売れた。だがはたして何人が実際に読破したか、また理解したかは疑問だったという。¹⁰⁰

だからこそ、一九六二年末から翌年初めにかけて現地赶赴したヒルズマンは、ベトナムで勝利をおさめる前提条件の一つが「戦争を過剰に軍事化しないこと」だと力説しなければならなかった。フィリップスは九月になっても、これが「軍事的な戦争ではなく政治的な戦争」、つまり「ベトナム相手の戦争というより人々の精神を争う戦争」なのだと訴えていた。¹⁰¹

軍事的対策が優先された理由は単純だった。南ベトナム全土が軍事的脅威にさらされていたからである。「インディアン（先住民）がまだそのあたりにいるのに、柵の外でトウモロコシを植えるのは非常に困難である。まずインディアンを追い払わなければならない」というのが、テイラー統合参謀本部議長長の弁である。「現地の農民指導者が組織的に殺されている状態では、土地改革計画を実施することはできない」とマクナマラも述べた。¹⁰² だから政治・経済・

社会的なプロジェクト推進も、究極的な勝利に不可欠なジエム政権の自由化も、まず「ほどほどの治安確立」がなければお話にならなかった。軍事面と政治面のバランスに苦慮するノルディング大使も、軍事的方策は「本当の仕事」、つまり経済・政治・社会的な計画促進のための「手段」だと考えていた。統合参謀本部のベトナム視察団がいうように、軍事的成功こそが「主として政治的・経済的成長にとつて好ましい条件を確立するのに必要」な前提条件だった。

ジョンソン國務次官代理がいうように「わが国の法律と伝統が、軍人を政治から遠ざけ、しかも彼らは戦争が始まれば政治は終わりと教え込まれている」のだとすれば、やむをえないことだったかもしれない。だが忘れてはならないのは、こうした傾向をいっそう強めたのは、ケネディが一九六一年に開始した介入拡大政策だったということである。ベトナムが軍事問題化するのを黙認したことがケネディの「大きな誤り」だったと、シュレジンガーはのちにベトナム戦争の経緯と教訓を検討する上院外交委員会の公聴会でいつている。

その一因は、ベトナムに限らず「共産ゲリラや叛徒と戦うのに必要な軍事的重荷が……ペンタゴン〔国防省〕に委ねられた」(ソレンセン) ことにある。ノルディング大使によれば、ラスク國務長官が軍事偏重のベトナム政策形成に不満を抱かず「けっしてベトナムに足を踏み入れなかった」ために、マクナマラが「ベトナム政策決定の隙間を埋めた」のである。だがそれは一九六〇年代前半、ベトナム介入拡大の局面で大きな意味を持っていたと指摘されている。

一九六三年初め、ベトナムを視察したホイラー大將らは、この戦いに政治・経済・社会的側面が絡み合っていることを「ジエム大統領は十分に理解しているが、部下の多くはそうではない」と報告している。ノルディング大使も、「ベトナム人官吏の一部は、基本は政治だといふこの戦争の特質にさほど敏感ではない」と、むしろジエムに同情的だった。だが「政府の軍事・経済・政治計画を統合するのにジエムが直面している困難」(テイラー) を解決できな

かった責めはやはりジエム自身が、そしてそうさせたアメリカが負うべきものだったろう。しかもその政治的欠陥が深刻になればなるほど、ジエム政権は軍事的手段に依存せざるをえなかった。⁽¹⁰⁾

政治的側面の重要性を訴え、米軍の現状がゲリラ戦争に対処できないことを憂う声も米軍内に皆無ではなかった。しかし彼らは少数派で、しかも冷遇された。⁽¹¹⁾ フォレストルは「戦争を通常戦争に、そしてアメリカの事業に変える」のはいわば「ペンタゴンの抑えがたい本能」なのだと述べたことがある。それは米軍にとってモーゼの『十戒』のよ
うなものだったとさえいう。⁽¹²⁾

ケネディ政権が新たな挑戦として強調した民族解放戦争など、ギリシャでもフィリピンでもマラヤでもキューバでも展開されてきた「古くからあるゲームの新しい名前」にすぎないと、テイラーは鼻であしらっている。眼前にゲリラ戦争が展開されていることなど構いなく、米軍は敵である民族解放戦線もまた通常戦争を行おうとしているのだという前提に立ち、過去二世紀にわたってみずからが育成してきたやり方を、なんの疑問もなくベトナムに適用した。⁽¹³⁾

通常戦争への傾斜は一九五〇年、つまりアメリカがフランスへの軍事援助を開始したときに始まっていた。一九六〇年代半ばまで、平定作戦はいわば「通常戦争という犬のちっぽけな尻尾」のような扱いを受けたとコーマーはいう。民心を得る努力など、文民に任せておけばよい、というわけである。⁽¹⁴⁾ フランスの失敗についてある米將軍は「殺し方が足りなかったのだ」とうそぶいたという。⁽¹⁵⁾

ボール (George W. Ball) 國務次官は、ベトナムは「多くの者にとつて、朝鮮戦争の繰り返しに見えた。それは一九六〇年代初め、まだ鮮烈な記憶だった」と回顧する。いやそれどころか、クルラック (Victor H. Krulak) 少將のよ
うに、第二次世界大戦における欧州戦線のイメージを抱いていた者も少なくない。しかも彼は新しい種類の戦争について学ぶ姿勢を示し、ケネディ兄弟が期待を寄せた数少ない將軍の一人だった。⁽¹⁶⁾ とすればあとは推して知るべしだろ

う。のちにベトナムで五〇万二途を超える米軍を率いることになるウェストモーランド (William C. Westmoreland) も、自分たちが「第二次世界大戦のレンズを通して」この戦争を見ていたという。それも、「反乱鎮圧という状況における通常戦争的な軍の考え方の弱点」が正されなかった結果である。⁽¹¹⁷⁾

しかも朝鮮戦争の経験は、反乱鎮圧を含む限定戦争、つまり政治的考慮に縛られた窮屈な戦争への強い嫌悪をもたらししていた。ルメイ空軍参謀総長はのちに、限定戦争という「間違った、非現実的」な考え方がアメリカの軍事戦略・態勢を支配していると苦々しげに述べている。反乱鎮圧戦略、つまり「文民製かつ文民主導による軍事力の中途半端な適用」(カッテンバーグ)を軍に押しつけるケネディ政権、とりわけマクナ马拉国防長官への強い反発が生じたのも無理はない。⁽¹¹⁸⁾

ケネディ大統領は一九六三年七月の記者会見で、この戦いを「一〇年も続いてきた内戦」と呼んでいる。だがケネディ政権内部には、この戦争について二つの相反する理解があった。第一に、共産主義者による革命の輸出、つまり侵略が引き起こしたと見るもの。第二に、古くからの内戦が再発したとみなすものである。⁽¹¹⁹⁾

政権内で優勢だったのは前者、つまり北朝鮮軍が北緯三八度線を超えて突如南進したのと同じく、南ベトナムの内戦と見えるものは北緯一七度線の北からの攻撃にはかならないという見方だった。ラスク國務長官は一九六三年四月、それを「北ベトナムによつて組織され、指揮され、部分的に物資補給を受けている侵略」と呼んだ。ルメイはのちに、ベトナムでの戦いは「今日共産主義者が用いている戦略の典型的かつ明々白々な一部分」であり、「計算ずくの侵略」だと断言している。⁽¹²⁰⁾

ベトコンが南ベトナム自生の運動だというのは「虚構」(ヒルスマン)にすぎない。それどころか連中は「たんなるハノイの手先」だというのがワシントンの常識だった。外からの侵略である以上、アメリカの行動も正当化される

はずだったとポールはいう。共産陣営は手を変え品を変え——「西ベルリンに対しては脅迫、台湾海峡では通常戦力による攻撃、韓国では侵略、ラオスでは反乱、コンゴでは蜂起、中南米では浸透、そしてベトナムではゲリラ（ソレンセン）——つねに正当な、自由な政府を倒そうとしているのであった。⁽¹⁰⁾いや、ロッジ駐サイゴン大使にいわせれば冷戦すらこの紛争とは無関係だった。「それはイデオロギーの問題ではなかった。北が南を征服しようとしたのである」と彼は回顧している。⁽¹¹⁾

当時、外部からベトコンへの補給は、ほぼ三割が海路、七割が陸路経由といわれた。⁽¹²⁾ロストウによればそれは、反乱鎮圧の遂行を阻害し、アメリカの士気を阻喪させ、サイゴンの政治的混乱を増大させるなど、いくつもの効果を持つ「安上がりな装置」だった。とりわけベトナム⇨ラオス国境付近を南北に走る人員や物資などの浸透経路、いわゆるホー・チ・ミン・ルート（Ho Chi Minh Trail）が重要だった。米軍部などではこれを「ハリマン記念高速道路（Averell Harriman Memorial Highway）」と揶揄する者がいた。ハリマンの尽力で一九六二年七月にジュネーブ協定が成立、ラオス内戦がいちおう終息したものの、ラオス領内の共産勢力もホー・チ・ミン・ルートも手つかずで残ったからである。⁽¹³⁾

ハーキンス司令官は、「ラオスとカンボジアが存在する限り、国境問題は残る」と断言した。とりわけ頭痛の種はラオスだった。「ラオス問題に本気で取り組まない限り、カンボジアにおける国境監視問題は本質的に机上の空論にすぎない」とさえいわれた。⁽¹⁴⁾逆に、「もしラオス⇨ベトナム国境を封印できれば、ベトコンの戦争遂行を大きく阻害することができるはず」だった。そうなればゲリラは物資や人員を南の国内に頼らざるをえない。だがアメリカのこ入れとジエム政府の進歩でそれは困難になっている。米軍内部にはこうした皮算用が生まれていた。⁽¹⁵⁾

だが浸透を問題にすることじたいに「失敗の言い訳」や「エスカレーション賛成論」が含まれているのをケネディ

は知っていたとヒルズマンはいう。実際のところゲリラは兵力も物資も南の農村から手に入れていたのであり、南の農民たちがそれを支えていた。⁽¹²⁷⁾だがロストウによれば、たとえ少数でも北からやつてきた幹部たちが「ベトコンの努力の骨格を形成」していること、したがって「ベトコンにとって数からいえば不釣り合いなほどの価値」があることが重要だった。⁽¹²⁸⁾

だが「ラオスからの浸透を止めるのはきわめて困難」だと、ハリマンの補佐官ジョーデン (William Jordan) はいつている。ベトナム⇨ラオス国境の上空を飛んでみればよい。そこでは「何マイルにもわたる山々と険しい峡谷が眼下に折り重なっている。地域全体が、踏み入ることもできないほど繁った森に覆われている。ときおり小屋が見え、あるいは三つか四つの小屋の群れが目にとまるが、それがどこかは特定できない。……ラオス国境がどこにあるのか、誰にもまるでわからない」。⁽¹²⁹⁾

だがケネディが宇宙開発について述べた「容易だからではなく、困難だから」月面到達に挑戦するのだという精神は、ベトナムでも遺憾なく発揮された。一九六一年末以来、ベトナム⇨ラオス国境付近に住む山岳民族に武器を与え、彼らを訓練し、国境監視やゲリラの追尾などにあたらせたのもそのためである。ベトナムに限らず、発展途上地域で「グリーン・ベレーのような兵力」(ジョンソン国務次官代理)を養っておくことが肝要だった。紛争への活用だけでなく、場合によっては米軍が使えないような第三国にも投入できるからである。⁽¹³⁰⁾

国境外からの脅威を根本の問題と見る限り、侵略の源泉、つまり北ベトナムへの攻撃を求める声が出るのは時間の問題だった。ケネディ政権でまず検討されたのは北ベトナムでの隠密作戦である。だが一九六三年四月、ヒルズマンは、それは「ある段階では効果的な反乱鎮圧計画を補完するものとして役立つ」かもしれないが、そうした計画に「効果的に代わるものにはならない」と警告した。同じ頃、トンプソンはケネディに、破壊工作などのために送り込まれ

た南ベトナム人たちは「アマチュア」にすぎず、「北ベトナムのプロによる国防・治安・諜報対策を相手に、しかも彼らのホームグラウンドでは」太刀打ちできないと報告している。^(一四)

ケネディ暗殺直前の十一月二〇日、ホノルルでマクナマラ国防長官を中心に行われたベトナム対策会議でも、具体的な対北ベトナム作戦計画が検討された。のちにジョンソン政権下で「34A作戦計画(Operation Plan 34A)」となり、いわゆるトンキン湾事件のきっかけをつくったものである。しかもそれに先だつ数カ月間、工作員の潜入、宣伝ビラの散布、情報収集や破壊活動など、南ベトナム人による小規模な隠密行動が実施されていたが、効果はたいしてなかったとマクナマラは回顧する。^(一四)

北ベトナムへの公然たる攻撃もケネディ政権下で、とくにラオス情勢の緊迫化と歩調を合わせて計画立案が進められた。ケネディの死とともに、「肥やし^(一四)の山に目を向けねばならないのに、蠅を打とうとしている」(ルメイ)ことへの苛立ち、そして北ベトナムを直接叩きたいという欲求が急激に強まっていったのである。^(一四)

四 アメリカ式戦争の陥穽

テイラー統合参謀本部議長がいうように、ベトナムは、ゲリラ戦争への対処法にかんする「現在進行中の実験室」だった。大成功をおさめた実験の一つが、一九六一年末に導入されたヘリコプターである。まず輸送ヘリ、ついで武装ヘリの登場はこの「戦争に劇的なまでに新たな次元をもたらした」とメクリンはいう。ヒルズマンによればとくに最初の数カ月、ベトコンは逃げまどい、ときに隠れ場所から飛び出して政府軍の餌食になった。こうしてヘリはベトナムにおけるアメリカの軍事的存在の象徴となった。^(一四)

とりわけヘリの利点は政府軍部隊をいたるところに運べる「ファンタスティックな機動力」(ヒルズマン)にあった。空中から敵発見の知らせを受けてからの反応時間は「劇的に短縮」した。従来容易に近づけなかつた地域にもベトナム軍を輸送し、ゲリラから戦闘の主導権を奪えるようになった。この「空中機動力」がまったく新しい戦争のスタイルを出現させ、これ以降の展開を支配したとさえいわれる。

しかしベトコンが逃げまどうのを止め、勇敢に立ち向かうようになると、ヘリの効果は急速に失われていった。彼らは、さしものヘリが十分活躍できないジャングルの奥深くや山岳地帯で力を蓄え、ヘリの着陸予定地点に待ち伏せ攻撃をかけた。対空砲火によるヘリの損害もしだいに増えた。トンブソンもケネディに、ヘリの活用は「ベトコンの集結を阻止し、ベトコンを驚かすには有益な道具だが、大規模な勝利にはつながらない」と指摘した。一九六四年早々のことだが、解放戦線のゲエン・フート (Nguyen Huu Tho) 議長は、戦略村の破綻と並んで、ヘリの効果が失われたことを、アメリカが展開する特殊戦争の動揺を示すものだと述べている。解放戦線は、一九六二年末までには主導権を取り戻しつつあった。

ヘリが駄目なら、固定翼機(戦闘爆撃機など)を用いた空爆という手だてがあった。空爆はベトコンが作戦遂行のため集結するのを阻止するうえで「不可欠」だとトンブソンもいつている。夜明けから日没まで、ひとすじでも煙が立てば爆弾の雨が降った。とくにナバーム弾の投下について、ハーキンス將軍は、「神の恐ろしさをベトコンに叩き込む」兵器として「非常に効果的」だと激賞した。

もつとも空爆の効果には異論もあった。ベトコンが住民の中に紛れこんでいる以上、住民のいる地域を対象とせざるをえない。ゲリラそのものが空爆にどれほど脆弱かも疑問だった。「これが政治戦争だということを忘れてはならない」とハリマンはノルディングに伝えている。ルメイ空軍参謀総長ものちに、「ゲリラ戦争では空軍ができないこ

ともやはり多い」と渋々認めている。⁽¹¹⁾

だがそれでも米軍首脳は空爆に固執し、批判に反発した。空爆が「無差別殺人」だとする非難は当たっていないし、ベトナムがテロを続けていることを考えても、ある程度の犠牲はやむをえない。また、通常の戦闘活動以上に空爆が住民の離反を招いたという証拠もない。⁽¹²⁾ 軍事援助顧問団の空軍要員を率いるアンシス (Roland H. Anhis) 准将は、「现阶段で空軍の役割を縮小することほどベトナムの利益につながることは考えられない」と述べている。⁽¹³⁾ ケネディ政権内部にはこうした空爆信仰が蔓延しており、アメリカの空の戦争が実質的に始まっていった。そこには空からの攻撃が「现阶段ではベトナムの拠点にまで到達できる唯一の戦力」(ハーキンス) だという切迫した事情もあった。⁽¹⁴⁾

ベトナムの大地でも、火力と機動力を両輪とするアメリカ式戦争が展開された。とりわけ機動力発揮の担い手となったのが、水陸両用の M113 装甲兵員輸送車である。ヘリと並ぶ M113 の導入によって解放戦線側がかなり苦しめられたことは事実である。ハーキンス司令官はこの「素晴らしい優秀な戦闘車両」が敵に大損害を与えたと絶賛した。⁽¹⁵⁾

だがヒルズマンは「大規模作戦、火炮、空爆、鈍重大隊規模の部隊」への依存に警鐘を発した。⁽¹⁶⁾ あるアメリカ人のゲリラ専門家によれば、ゲリラ戦で最善の武器はナイフ、次善がライフルだった。最悪なのは爆撃機、それに次ぐのが大砲である。そもそもゲリラを相手の政治戦争で砲爆撃を用いることじたい、政府側が敗れつつある何よりの証拠だった。⁽¹⁷⁾

しかし、大規模な戦いを挑み、大兵力と猛烈な火力によって敵を完全に屈服させる伝統は、南北戦争にまでさかのぼれるという。これほど根深い「大規模戦闘」症候群は、一朝一夕には改まらなかつた。⁽¹⁸⁾ のちにロバート・ケネディは、アメリカが過去二〇年にわたる「新しい戦争」の教訓をまったく無視し、政治的側面とは無関係に通常戦争、空爆、科学技術、軍隊に頼ってきたと指摘している。機動力を高め、政府軍の指揮官たちの質も向上させれば、戦場で

ベトナムが享受している兵力面の優位を打破できる。政府軍はより攻撃的になり、夜も彼らのものではなくなる。アメリカはこう期待していた。⁽¹¹⁸⁾

ベトナム戦争で最も悪名を馳せた兵器の一つが、枯葉剤である。一九六二年には五六八一エーカー、六三年には二万四九四七エーカーの土地に散布された（合計では五二二万九四八四エーカー）。⁽¹¹⁹⁾ その目的は道路・運河沿いや軍事施設の付近などからゲリラが身を潜められる場所をなくすこと、ゲリラが食糧を入手できないようにすることである。現地を訪れたフォレストルも、この点で薬剤散布には「明瞭な軍事的価値」があると認めている。⁽¹²⁰⁾

だが一九六三年の段階で、いくつかの限界も指摘されていた。隠れ場所をなくすためには、人手で木々を伐採するようがよほど低コストである。たとえ木が枯れても敵は密集した幹や枝、地形そのものを利用できる。田や畑をいくら破壊しても、もともと食糧が豊かな地域ではゲリラはたいして困らない。⁽¹²¹⁾ それどころか、枯葉剤散布によって住民の支持がかなり失われていた。共産側の非難や国際監視委員会（International Control Commission）の「雑音」（フォレストル）はいうまでもなかった。⁽¹²²⁾

メクリンは、南ベトナム政府軍の司令官たちには「新しいアメリカの装置に頼る傾向」が顕著で、まるで「松葉杖」なしでは歩けないかのような状態という。「機械と道具仕掛けを使えば、最小限の危険と物理的困難で簡単に勝てる」⁽¹²³⁾と思われたからである。そうしたさまを不安げに見ていたイギリス人のトンブソンは、戦争に勝つのは「からくり仕掛け」ではなく「足と脳」、つまり人間の力なのだ⁽¹²⁴⁾とアメリカ側に力説した。

だが、そもそもこの原因は、空の戦争、火力・機動力の重視と並んで、ジョンソン国務次官代理のいう「反乱鎮圧のための新装置」への強い期待がワシントンに拡がっていたことだった。ケネディの隣人だった『ニューズウィーク』記者のブラドリー（Benjamin C. Bradlee）は、当時の雰囲気をよく表すエピソードを紹介している。一九六三年

春のこと、開発中の対人兵器を記者の一人が入手した。それは国防省のある大佐が、机の引出し一杯の中からよこしたものだ。記事になる前にこれを知らされた大統領は「だれかトンマが、くれたんだって？」と驚愕、激怒したという。一九六二年、研究開発の対象となった装置や兵器は三二二種に及んだ。⁽¹⁵⁾

科学技術への過剰な依存もまた、伝統的なアメリカ式戦争の大きな特徴だった。新しい兵器体系をベトナムで試したいという欲求の背後には、アメリカ人の傲慢と自信過剰があったと指摘されている。⁽¹⁶⁾ しかも、新兵器を引っさげての介入大規模化は、たしかに南ベトナムの士気を高揚させ、政府軍の行動を刺激し、戦局の主導権を取り戻したように見えたのである。⁽¹⁷⁾

一九六二年秋、ハーキンスはテイラーに勝利の鍵として「三つのM」を挙げた。兵力 (Men)、資金 (money)、物資 (material) である。しかもそれらはすでに、いずれも大々的に戦場に投入されつつあった。⁽¹⁸⁾ 「戦争を非人格化し、資源展開の実演としてばかり扱った」結果、アメリカは「北ベトナムの成功の秘訣」から目をそむけてしまったとポールはいう。つまり、意志、目的、忍耐力などである。「近代的な、ハイテクにもとづいた軍事的装備、兵力、軍事思想の限界」(マクナマラ) が本当にベトナムで露呈されるのはこのことだが、一九六三年の時点ですでにその萌芽は見られたのである。⁽¹⁹⁾

だがアメリカ自身の軍事力への過信を背景に、ケネディは「アメリカが、この新しく古い戦争に備えて、効率的に訓練・武器・指導力を提供できると信じていた」とソレンセンは述懐する。介入に懐疑的だった元國務次官のボウルズ (Chester A. Bowles) 駐インド大使でさえ、「大胆な政治計画に適度の米軍のコミットメントを添え、そこにはんのわずか幸運がともなえば」東南アジアで潮流を変え、情勢を好転させられると述べていた。⁽²⁰⁾

ゲリラ戦争の対処に多くの提言を行ったヒルズマンは、「南ベトナム用に開発された戦略概念は、依然として基本

的に適切である。それを十分に、活力をもつて実施することができさえすれば、その結果勝利が得られる」と自信満々だった。「なせばなる精神」は米軍の伝統だったし、ケネディ時代の特徴でもあった。何をすべきかはアメリカ人が承知している。無能なベトナム人はその助言をかしこまって実行すればよい。それは一九五〇年代から一貫した傾向だったという。

北ベトナムのファン・バン・ドン(Pham Van Dong)首相はあるインタビューで、アメリカ人は「長いだらだらした戦争が嫌い」だから最後の勝利はわがものだと語ったことがある。イギリス人であるトンブソンもまた、アメリカ人が抱える最大の弱点が「忍耐力のなさ」にあると見ていた。ノルテイング大使はマクナマラ国防長官に、「あなたはベトナムの牛車にフォードのエンジンをつけようとしている。壊れてしまいますよ」と訴えたことがあるという。ロストウによれば、ほんらいケネディ政権がベトナムで求めたのは、「ブロードウェイでの紙吹雪パレードもない——劇的な戦いも、アメリカによる壮大な勝利の祝典もない」勝利のはずだった。「達成には多くの歳月を要し、何十年もの激務と献身——多くの人々の——」が必要で「勝利でもあった。だが結局のところアメリカは、「ベトナム政府が不快な、長引く戦いに直面している」という現実をけつして受け入れようとはしなかった。

アメリカは「ゲリラ・ギャップ」——一九五〇年代の「爆撃機ギャップ」や「ミサイル・ギャップ」のように、ゲリラの挑戦にアメリカが対処できずにいる状態——を正すべく邁進しなければならなかったとメクリンはいう。だがシュレジンガーはのちに、結局アメリカはベトナムで「ゲリラ運動に対処できる能力がないことを示した」にすぎないと述べている。建国以来二〇〇年近くも栄光に包まれてきたアメリカ式戦争を変えることは容易ではなかった。その結果、マクナマラが「未知なる大地(terra incognita)」と呼ぶ場所、つまりベトナムで頓挫を味わったのである。ベトナム戦争は「それまでアメリカが経験したどの大きな紛争とも」非常に異なっていたとコーマーは強調する。

カッテンバーグはこう述べている。「われわれは反乱鎮圧をどのように用いるべきかまったく知らなかった。というのも、それが何を意味するのかほとんどわからなかったからだ。反乱鎮圧はベトナムでも他の場所でもわれわれを挫折させ、結局は捨て去られた」。つまり反乱鎮圧戦略はベトナムで失敗するどころか、「本当にベトナムで試されたことなどなかった」(シュレジンガー)のである。アメリカはみずから慣れたやり方をベトナムに移植し、失敗し、しかも十分にそれを認識できなかった。ワシントンで考案された概念や構想はつねに正しいのであり、問題は「この政策と、現場における実施面との大きなギャップ」にすぎなかったのだとコーマーは論じている。⁽¹⁰⁾

マクナマラはのちに、アメリカが相手としたナシヨナリズムの力を過小評価したこと、軍事力と経済支援の活用によっていわゆる国家建設が可能になるという誤った信念⁽¹¹⁾などを反省点に挙げている。自信満々のアメリカは、一〇年近く前にフランスが味わった敗北から学ぶべきものなどないと確信していた。フランスの敗因は植民地主義と、十分な軍事的努力を払わなかったことだとメクリンは述べている。そこには、アメリカが行っているのは「共産主義の膨張から南ベトナム人を救うための私心のない戦い」⁽¹²⁾だという幻想が存在していた。ある将軍がいはなつたように、「ナポレオン(Napoleon)以来戦争に勝ったことがない」フランスに学ぶべきものなど何一つないという傲岸不遜な姿勢もまたその底流をなしていた。⁽¹³⁾

おわりに

ベトナム経験はアメリカにとって、建国以来の不敗神話の崩壊であり、アメリカが自信満々に推し進めていた発展途上世界における国家建設戦略の破綻であり、アメリカ的な理念や価値観の世界への拡大の否定だった。そしてアメ

リカの敗北は、戦争が本格化する以前、すでに一九六三年の時点でアメリカの反乱鎮圧戦略が挫折していたという事実の帰結にほかならない。

第一に、戦略村に見られるように、ほんらい反乱鎮圧戦略は政治戦争としてこの戦いを捉えていた。しかし現実にはそれはまったく機能しなかつたのである。当時も、そしてのちになつても、何の反省もなしに責めを南ベトナム側に負わせた結果、アメリカは同じやり方をひたすら、しかもより大々的に展開していった。

第二に、そこにはこの戦争があくまでもケネディのいう「彼らの戦争」、つまりアメリカ人ではなくベトナム人が行う戦いだという虚構があつた。その矢面に立つのは当然、南ベトナムの政府と軍だつた。だがアメリカは、肝心要の政府軍の脆弱さをついに克服できなかったのである。

第三に、アメリカの対応は政治的というより軍事的、ゲリラ戦争対策より通常戦争的な対処に傾斜していった。そうしたやり方がベトナムに向くかどうかは顧慮されなかつたか、頭から有効性が信じられていたからである。また、アメリカが内在的な紛争要因を看過し、戦場の外にばかり目を向けたからでもあつた。

第四に、その根底にはアメリカ式戦争に内在する限界が反映されていた。アメリカはつねに短期的・物理的な手段に依拠し、具体的には空軍力を中心とした火力と機動力、最新の科学技術に頼りすぎた。その結果、鳴り物入りで導入された反乱鎮圧戦略は、ベトナム政策全体とともに「目に見えて沈んでいった」⁽¹⁴⁾のである。

しかしおそらくより大きな問題は、そこでケネディ政権が何も学ばなかつたことだろう。自分たちはたしかに「ゲリラ戦争を戦うための戦略概念」を編み出したのだが、たんに「それをきちんと試みるよう、ジェム政権やペンタゴンの首脳を納得させられなかつた」ことだけが問題だつたのだとヒルズマンは回顧している。マクナマラははるかのかちになつても、「われわれは価値や意図についてではなく、判断と能力について間違いを犯した」と片づけている。⁽¹⁵⁾

だが、どのように戦うかは、何をめざして戦うかと同程度に重要だった。ケネディ政権はベトナムという場で、みずからの歴史や伝統が培った傲慢さと戦い、そして敗れたのである。

注

- (1) Douglas A. Borer, *Superpowers Defeated: Vietnam and Afghanistan Compared*. London: Frank Cass, 1999, p.204.
- (2) 拙著『ベトナム症候群——超大国を苛む「勝利」への強迫観念』中公新書「二〇〇三年を参照」。
- (3) Bruce Palmer, Jr., *The 25-Year War: America's Military Role in Vietnam*. Lexington: Univ. Press of Kentucky, 1984. George C. Herring, *America's Longest War: The United States and Vietnam, 1950-1975*. New York: Alfred A. Knopf, 2nd ed., 1986 (orig. John Wiley & Sons, 1979).
- (4) 拙著『ダレス外交とインドシナ』同文館、一九八八年および「一九六一 ケネディの戦争——冷戦・ベトナム・東南アジア」朝日新聞社、一九九九年を参照。
- (5) Annual Message to the Congress on the State of the Union, Jan.14, 1963, *Public Papers of the Presidents of the United States: John F. Kennedy* [以下 PPP と略記] 1963. Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office [以下 USGPO と略記], 1964, p.11. Bigart in Arthur M. Schlesinger, Jr., *A Thousand Days: John F. Kennedy in the White House*. Boston: Houghton Mifflin, 1965, p.548.
- (6) U.S. Dept. of Defense, *United States-Vietnam Relations 1945-1967* [以下 USVR と略記], Book 3, IV.B.5, p.i. William Colby (with James McCarger), *Lost Victory: A Firsthand Account of America's Sixteen-Year Involvement in Vietnam*. Chicago: Contemporary Books, 1989, p.169. William P. Bundy, "The Path to Viet Nam: Ten Decisions," *Orbis*, vol.11, no.3 (Fall 1967), p.656. Robert S. McNamara (with Brian VanDeMark), *In Retrospect: The Tragedy and Lessons of Vietnam*, New York: Times Books,

- 1995, pp.320-1. Robert S. McNamara, et al., *Argument Without End: In Search of Answers to the Vietnam Tragedy*, New York: Public Affairs, 1999, pp.15,157. Paul M. Kattenburg, *The Vietnam Trauma in American Foreign Policy, 1945-75*, New Brunswick, N.J.: Transaction Books, 1980, p.119.
- (7) ケネディのベトナム政策 及び一九六三年の破綻についての研究として、以下が著述がある。William J. Rust, *Kennedy in Vietnam*, New York: Charles Scribner's Sons, 1985. William Conrad Gibbons, *The U.S. Government and the Vietnam War: Executive and Legislative Roles and Relationships, Part II: 1961-1964*, Princeton, N.J.: Princeton Univ. Press, 1986. Ellen J. Hammer, *A Death in November: America in Vietnam, 1963*, New York: E.P. Dutton, 1987. John M. Newman, *JFK and Vietnam: Deception, Intrigue, and the Struggle for Power*, New York: Warner Books, 1992. Noam Chomsky, *Rethinking Camelot: JFK, the Vietnam War, and US Political Culture*, Montreal: Black Rose Books, 1993. Francis X. Winters, *The Year of the Horse: America in Vietnam, January 25, 1963-February 15, 1964*, Athens: Univ. of Georgia Press, 1997. Lloyd C. Gardner & Ted Gittinger, eds., *Vietnam: The Early Decisions*, Austin: Univ. of Texas Press, 1997. Fredrik Logevall, *Choosing War: The Lost Chance for Peace and the Escalation of War in Vietnam*, Berkeley: Univ. of California Press, 1999. Lawrence Freedman, *Kennedy's Wars: Berlin, Cuba, Laos, and Vietnam*, New York: Oxford Univ. Press, 2000. David Kaiser, *American Tragedy: Kennedy, Johnson, and the Origins of the Vietnam War*, Cambridge, Mass.: Belknap Press, 2000. Michael E. Latham, *Modernization as Ideology: American Social Science and "Nation Building" in the Kennedy Era*, Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 2000. Philip E. Catton, *Dien's Final Failure: Prelude to America's War in Vietnam*, Lawrence: Univ. Press of Kansas, 2002.
- (8) W. W. Rostow, *Diffusion of Power: An Essay in Recent History*, New York: Macmillan, 1972, p.134. Roger Hilsman, *To Move a Nation: The Politics of Foreign Policy in the Administration of John F. Kennedy*, New York: Delta Books, 1967 (orig. Dell Publishing, 1964), p.413. Curtis E. LeMay (with Dale O. Smith), *America Is in Danger*, New York: Funk & Wagnalls, 1968,

- (9) U. Alexis Johnson (with Jef Olivarius McAllister), *The Right Hand of Power*, Englewood-Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, 1984, p.413. マンナマラの発言は、ウイリアム・カウフマン (桃井真訳) 『マンナマラの戦略理論』ペリカン社、一九六八年、八五頁。
- (10) Rostow, *op.cit.*, p.279. Robert Thompson, *Defeating Communist Insurgency: Experiences from Malaya and Vietnam*. London: Chatto & Windus, 1966, p.122.
- (11) John Mecklin, *Mission in Torment: An Intimate Account of the U.S. Role in Vietnam*, Garden City, N.Y.: Doubleday, 1965, p.317. 農民の割合については、バーナード・フォール (松元洋訳) 『ヴェトナム戦史』至誠堂、一九六九年、二〇八頁および F・グリーン (仲晃訳) 『写真と記録 ベトナム戦争』河出書房、一九六六年、四一頁。
- (12) Memorandum, Hilsman & Forrestal to President, Jan.25, 1963, U.S. Dept. of State, *Foreign Relations of the United States, 1961-1963* [以下 FRUS と略記], vol.3 (Vietnam January-August 1963), USGPO, 1991, p.51. National Intelligence Estimate 53-63, April 17, 1963, *ibid.*, 3, p.234. Current Intelligence Memorandum, Jan.11, 1963, *ibid.*, 3, p.21.
- (13) "Performance of U.S. Mission," Annex to Memorandum, Hilsman & Forrestal to President, Jan.25, 1963, *ibid.*, 3, p.61.
- (14) Theodore C. Sorensen, *Kennedy*, New York: Harper & Row, 1965, p.649.
- (15) Kenneth P. O'Donnell & David F. Powers (with Joe McCarthy), "Johnny, We Hardly Knew Ye": *Memories of John Fitzgerald Kennedy*, New York: Pocket Books, 1973 [orig. Boston: Little, Brown, 1970], p.443. Rostow, *op.cit.*, p.298. Sorensen, *op.cit.*, p.658. シュレジンガー、前掲、四三頁。シオリア・C・ソレンセン (山岡清三訳) 『ケネディの遺産——未来を拓くために』サイマル出版会、一九七〇年、一六二、一七九頁。
- (16) チュオン・ニユ・タン (吉本晋一郎訳) 『ベトナム・メモワール——解放された祖国を追われて』原書房、一九八六年、四頁。小沼新『ベトナム民族解放運動史——ベトナムから解放戦線へ』法律文化社、一九八八年、二二八—二九頁。

- (17) Gerald J. DeGroot, *A Noble Cause?: America and the Vietnam War*, Harlow, U.K.: Longman, 2000, pp.76,97.
- (18) デービッド・ハルバスタム(泉鴻之・林雄一郎訳)『ベトナム戦争』みすず書房、一九六八年(改題『ベトナムの泥沼から』一九六八年)、八六頁。
- (19) *USVR*, 3, IV.B.5, p.2, Memorandum, Taylor to McNamara JCSM-180-63, March 7, 1963, *FRUS*, 3, p.134.
- (20) Hilsman, *op.cit.*, pp.431-2.
- (21) Thompson, *op.cit.*, pp.123-5, Meeklin, *op.cit.*, p.25.
- (22) 谷川榮彦(編著)『ベトナム戦争の起源』勁草書房、一九八四年、二二三頁。
- (23) Research Memorandum RFE-58, July 1, 1963, *FRUS*, 3, p.441. ユーター・アーネット(沼澤洽治訳)『戦争特派員——CNN名物記者の自伝』新潮社、一九九五年、八九頁。Latham, *op.cit.*, p.188.
- (24) Letter, Harkins to Diem, Feb.23, 1963, *FRUS*, 3, p.118, Memorandum, Wood to Harriman, Feb.28, 1963, *ibid.*, 3, p.130, Memorandum, Taylor to President CM-882-63, n.d., *ibid.*, vol.4 (Vietnam August-December 1963), USGPO, 1991, p.99.
- (25) Hilsman, *op.cit.*, p.522, Memorandum, Phillips to Brent, May 1, 1963, *FRUS*, 3, p.257.
- (26) Memorandum, Hilsman to Rusk, n.d.[April 1963], *ibid.*, 3, p.191, Rusk in Airgram, Dept. of State [文ト DOS ヲ略記] to All Diplomatic Posts CA-12341, May 3, 1963, National Security Files [文ト NSF ヲ略記], Box 197, folder "Vietnam 5/1/63-5/17/63," John F. Kennedy Library, Boston [文ト JFKL ヲ略記], *Vietnam : National Security Files, 1961-1963*, Bethesda, Md.: University Publications of America, 1991 [文ト VNSF ヲ略記], reel 4-frame 408(microfilm). Research Memorandum RFE-58, July 1, 1963, *FRUS*, 3, pp.438,440.
- (27) 谷川、前掲、二二八頁。Colby, *op.cit.*, p.102. ウィリアム・E・コルビー(大前正臣・山岡清二訳)『栄光の男たち——ウィリアム・コルビー元CIA長官回顧録』政治広報センター、一九七八年、一七五—六頁。CIA Information Report TDCS-3/655,859, Aug.2, 1963, *FRUS*, 3, p.551.

- (28) Catton, *op.cit.*, p.117.
- (29) Memorandum, Hilsman & Forrestal to President, Jan.25, 1963, *FRUS*, 3, p.49. Chester L. Cooper, *The Lost Crusade: America in Vietnam*, New York: Dodd, Mead, 1970, p.203.
- (30) ウイルフレッド・バーチエット(真保潤一郎訳)『解放戦線』みすず書房、一九六四年、八四頁。アーネット、前掲、九二頁。フォール、前掲、三四七頁。
- (31) Memorandum, Phillips to Brent, May 1, 1963, *FRUS*, 3, p.258. Memorandum, Mendenhall to Hilsman, Sept.17, 1963, *ibid.*, 4, p.246. David Halberstam, *The Best and the Brightest*, New York: Random House, 1969, p.297.
- (32) Minutes of Meeting of Special Group for Counterinsurgency, May 23, 1963, *FRUS*, 3, p.315. Frederick Nolting, *From Trust to Tragedy: The Political Memoirs of Frederick Nolting, Kennedy's Ambassador to Diem's Vietnam*, New York: Praeger, 1988, pp.54-5.
- (33) アーサー・シュレジンガーJr.(横川信義訳)『にがいの遺産——ベトナム戦争とアメリカ』毎日新聞社、一九六七年、五三頁。Gabriel Kolko, *Anatomy of a War: Vietnam, the United States, and the Modern Historical Experience*, New York: Pantheon Books, 1985, p.133.
- (34) Logevall, *op.cit.*, p.34. DeGroot, *op.cit.*, p.76.
- (35) ニール・シーマン(菊谷匡祐訳)『輝ける嘘』集英社、一九九二年、上、三六五頁。アーネット、前掲、九二頁。
- (36) Mecklin, *op.cit.*, p.283. ハルバスタム、前掲、一四〇頁。
- (37) Cable, CINCPAC to JCS 261715Z, March 26, 1963, *Declassified Documents Reference System* [以下DDRSと略記]、Arlington, Va.: Carrolton Press, Retrospective [以下Rと略記] document no.82C (microfiche).
- (38) Mecklin, *op.cit.*, p.93. Hilsman, *op.cit.*, p.446.
- (39) Thompson, *op.cit.*, p.138. Milton E. Osborne, *Strategic Hamlets in South Viet-Nam: A Survey and a Comparison*, Ithaca, N.Y.:

Dept. of Asian Studies, Cornell Univ., 1965, p.39. USVR, 3, IV.B.2, pp.v.36.

- (40) *Ibid.*, 3, IV.B.2, p.35. Tan Van Don, *Our Endless War: Inside Vietnam*, San Rafael, Ca.: Presidio Press, 1978, p.81.
- (41) Memorandum, Hilsman & Forrestal to President, Jan.25, 1963. FRUS, 3, p.58. Hilsman, *op.cit.*, p.441.
- (42) Osborne, *op.cit.*, pp.27,35-6.
- (43) チュオン・ニユ・タン、前掲、五七—八頁。友田錫『裏切られたインドナム革命——チュオン・ニユ・タンの証言』中央公論社、一九八一年、七四—六頁。Caton, *op.cit.*, p.133. Stanley Karnow, *Vietnam: A History*, New York: Penguin Books, 1984 (orig. Viking Press, 1983), p.257.
- (44) Memorandum, Phillips to Brent, May 1, 1963. FRUS, 3, p.257.
- (45) Paul D. Harkins Papers [文レ HP ヲ略記], Oral History [文レ OH ヲ略記], U.S. Army Military History Institute, Carlisle, Pa. [文レ MHI ヲ略記]
- (46) USVR, 3, IV.B.2, p.35. Humphrey in Latham, *op.cit.*, p.194.
- (47) Cooper, *op.cit.*, p.199. Maurice Isserman, *Vietnam War*, New York: Facts on File, updated ed., 2003 (orig. 1992), p.40. A R
V N 兵 Army of Republic of Vietnam の略。
- (48) ハルバスタム、前掲、一一三—七頁。シロン、前掲、上、二五—二二二頁。
- (49) DeGroot, *op.cit.*, p.77. Wilbur H. Morrison, *The Elephant and the Tiger: The Full Story of the Vietnam War*, New York: Hippocrene Books, 1990, p.82. Hilsman, *op.cit.*, p.449.
- (50) Cooper, *op.cit.*, p.199. シロン、前掲、上、三三—六頁。ハルバスタム、前掲、一一八頁。
- (51) Memorandum, JCS to President, Jan.3, 1963, NSF, 197, "Vietnam 1/1/63-1/9/63," JFKL, VNSF, 4-181. Cable, CINCPAC to JCS, et al., AIG 931, Jan.4, 1963, NSF, 197, "Vietnam 1/1/63-1/9/63," JFKL, *ibid.*, 4-186.
- (52) Kattenburg, *op.cit.*, p.113. Robert E. Vadas, *Cultures in Conflict: The Viet Nam War*, Westport, Conn.: Greenwood Press,

- 2002, p.15. DeGroot, *op.cit.*, p.77.
- (53) The Military History Institute of Vietnam (tr., Marie L. Pribenow), *Victory in Vietnam: The Official History of the People's Army of Vietnam, 1954-1975*, Lawrence: Univ. Press of Kansas, 2002, p.120. David W.P. Elliott, *The Vietnamese War: Revolution and Social Change in the Mekong Delta 1930-1975*, Armonk, N.Y.: M.E. Sharpe, 2003, vol. 1, p.405. 古田元夫『歴史と「越」のストナム戦争』大月書店、一九九一年、二三三頁。
- (54) President's News Conference, Dec.12, 1962. PPP 1962. USGPO, 1963, p.870. LeMay, *op.cit.*, p.234. Robert Thompson, *No Exit from Vietnam*, London: Chatto & Windus, 1969, p.53. Rostow, *op.cit.*, p.289.
- (55) Memorandum, Hilsman & Forrestal to President, Jan.25, 1963, FRUS, 3, p.51. JCS Team Report on South Vietnam, n.d. [Jan.1963], *ibid.*, 3, p.76.
- (56) Anthony James Joes, *War for South Vietnam: 1954-1975*, New York: Praeger, 1989, p.64. Mecklin, *op.cit.*, p.88.
- (57) Maxwell D. Taylor, *Swords and Plowshares*, New York: W.W. Norton, 1972, p.289. Catton, *op.cit.*, p.206.
- (58) シーハン、前掲、上、七九頁。Mecklin, *op.cit.*, p.34.
- (59) "Performance of U.S. Mission," Annex to Memorandum, Hilsman & Forrestal to President, Jan.25, 1963, FRUS, 3, p.60. Mecklin, *op.cit.*, p.97.
- (60) アルバート・マリン（駐文館編集部訳）『ヴェトナム戦争——象 vs 虎』駐文館（発売・星雲社）、一九九三年、八八頁。ハルバスタム、前掲、七九頁。
- (61) Halberstam, *op.cit.*, p.201. パーチエット、前掲、一四三頁。
- (62) シーハン、前掲、上、七五頁。小倉貞男『ドキュメント ヴェトナム戦争全史』岩波書店、一九九二年、一二八頁。
- (63) Osborne, *op.cit.*, p.29. Logevall, *op.cit.*, p.34.
- (64) シーハン、前掲、上、八一、一二七頁。Mecklin, *op.cit.*, pp.95,97.

- (65) Halberstam, *op.cit.*, p.250.
- (66) Mecklin, *op.cit.*, p.97. Memorandum of Conversation with Nhu, April 12, 1963, *FRUS*, 3, pp.224-5.
- (67) Mecklin, *op.cit.*, p.34. Cooper, OH, JFKL.
- (68) Paul M. Kattenburg, "Viet Nam and U.S. Diplomacy, 1940-1970," *Orbis*, vol.15, no.3 (Fall 1971), p.828. Kattenburg, *op.cit.* (1980), p.119. Rowny in Memorandum by Hilsman, n.d.[Jan. 1963], *FRUS*, 3, p.9.
- (69) Halberstam, *op.cit.*, p.201. Hilsman, *op.cit.*, p.446.
- (70) Mecklin, *op.cit.*, p.95. Halberstam, *op.cit.*, pp.200-1.
- (71) Mecklin, *op.cit.*, p.88. シーノン、前掲、上、一三三頁。ハルバスタム、前掲、八七、二二七頁。
- (72) Telegram, Saigon to DOS 478, Sept.11, 1963, *FRUS*, 4, p.172.
- (73) Canton, *op.cit.*, p.206. Kolko, *op.cit.*, p.128. Mecklin, *op.cit.*, p.95.
- (74) CIA Information Report Telegram TDCS-3/552.822, July 8, 1963, NSF, 198, "Vietnam 7/1/63-7/20.63," JFKL, VNSF, 4-619.
- (75) Mecklin, *op.cit.*, pp.90,94. Cooper, *op.cit.*, p.200. 谷川、前掲、九四頁。
- (76) ハルバスタム、前掲、三五頁。
- (77) シーハン、前掲、上、一〇五頁。ハルバスタム、前掲、二二三頁。バーチエット、前掲、八九頁。
- (78) CIA Current Intelligence Memorandum [SC No.02142/63], Jan.11, 1963, *FRUS*, 3, p.21.
- (79) Rober W. Komer, *Bureaucracy at War: U.S. Performance in the Vietnam Conflict*, Boulder, Colo.: Westview Press, 1986, p.48. Memorandum, Hilsman to Harriman RFE-66, Dec.19, 1962, *FRUS*, vol.2(Vietnam 1962), 1990, p.792.
- (80) Cable, CINCPAC to JCS, Feb.14, 1963, *DDRS*, R81C. Mecklin, *op.cit.*, pp.92-3. Colby, *op.cit.*, p.119.
- (81) CIA Current Intelligence Memorandum [SC No.02142/63], Jan.11, 1963, *FRUS*, 3, p.21. Memorandum, Hilsman to Rusk, n.d. [April 1963], *ibid.*, 3, p.192. Herring, *op.cit.*, p.88.

- (82) Mecklin, *op.cit.*, p.93. Joes, *op.cit.*, p.60. Memorandum by Hilsman, Jan.2, 1963, *FRUS*, 3, p.4.
- (83) Joes, *op.cit.*, pp.65,82. Morrison, *op.cit.*, p.77. Komer, *op.cit.*, pp.47-8.
- (84) Naval Message, CINCPAC to DIA 132315Z, March 13, 1963, *DDRS*, R81G. Hilsman, *op.cit.*, p.455.
- (85) 友田‘前掲’八〇頁。
- (86) Mecklin, *op.cit.*, p.94. John A. Nagl, *Counterinsurgency Lessons from Malaya and Vietnam: Learning to Eat Soup with a Knife*, Westport, Conn.: Praeger, 2002, pp.120-3.
- (87) Bundy, OH, Lyndon B. Johnson Library, Austin, Tex.
- (88) Joes, *op.cit.*, p.65. Latham, *op.cit.*, p.175. Komer, *op.cit.*, pp.41,44.
- (89) Cooper, *op.cit.*, p.200. Memorandum, Hilsman & Forrestal to President, Jan.25, 1963, *FRUS*, 3, p.53. Letter, Harkins to Diem, Feb.23, 1963, *ibid.*, 3, p.120.
- (90) Taylor, *op.cit.*, p.288. HP-OH. MHI.
- (91) *USVR*, 3, IV.B.4, p.6.
- (92) Kaiser, *op.cit.*, p.162. Schwab, *op.cit.*, p.55. Cooper, *op.cit.*, p.207.
- (93) Hilsman, *op.cit.*, p.426.
- (94) Wheeler in Airgram DOS to All Posts CA-8776, Feb.15, 1963, NSF, 197, “Vietnam 2/1/63-2/27/63,” JFKL. VNSF, 4-285. Harkins in James Pinckney Harrison, *The Endless War: Fifty Years of Struggle in Vietnam*, New York: Free Press, 1982, p.233. Letter, Harkins to Diem, Feb.23, 1963, *FRUS*, 3, p.120.
- (95) Mecklin, *op.cit.*, p.102. ルルビュー‘前掲’一九三頁。 *USVR*, 3, IV.B.2, p.18. Hilsman, *op.cit.*, pp.442,497.
- (96) Nagl, *op.cit.*, pp.126-7,201. Schwab, *op.cit.*, pp.40,91. Kaiser, *op.cit.*, p.150. Sorensen, *op.cit.*, p.657.
- (97) ハーネマート‘前掲’九四頁。 Arthur M. Schlesinger, Jr., *Robert Kennedy and His Times*, New York: Ballantine Books, 1979

- (orig. Boston: Houghton Mifflin, 1978), p.763.
- (86) ハルンスマイ『捕縛』一二八頁。Schwab, *op.cit.*, p.43.
- (87) O'Donnell & Powers, *op.cit.*, p.15. Robert F. Kennedy, *To Seek a Newer World*. Garden City, N.Y.: Doubleday, 1967, p.175.
- (88) J. Paul de B. Tailon, *The Evolution of Special Forces in Counter-Terrorism: The British and American Experiences*, Westport, Conn.: Praeger, 2001, pp.93-4.
- (89) Memorandum, Hilsman to Rusk, n.d.(April 1963), *FRUS*, 3, p.192. Phillips in Memorandum of Conversation at White House, Sept.10, 1963, *ibid.*, 4, p.165.
- (90) Taylor in David F. Schmitz, *Thank God They're on Our Side: The United States and Right-Wing Dictatorships, 1921-1965*, Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1999, p.251. McNamara in Sorensen, *op.cit.*, p.656.
- (91) Hilsman, *op.cit.*, p.526. Nolting, *op.cit.*, pp.53-4. JCS Team Report on South Vietnam, n.d.(Jan. 1963), *FRUS*, 3, p.81.
- (92) Johnson, *op.cit.*, p.332.
- (93) Komert, *op.cit.*, p.43. Schlesinger in U.S. Congress, Senate, Committee on Foreign Relations, *Causes, Origins, and Lessons of the Vietnam War*, USGPO, 1973, p.119.
- (94) Sorensen, *op.cit.*, p.631. Nolting, *op.cit.*, pp.62,129. Logevall, *op.cit.*, p.36.
- (95) JCS Team Report on South Vietnam, n.d.(Jan. 1963), *FRUS*, 3, p.81. Airgram, Saigon to DOS A-661, April 25, 1963, *ibid.*, 3, p.252.
- (96) Taylor, *op.cit.*, p.289. Kolko, *op.cit.*, p.142.
- (97) Robert Buzzanco, *Masters of War: Military Dissent and Politics in the Vietnam Era*, New York: Cambridge Univ. Press, 1996, pp.120-1,125.
- (101) Forrestal in Schlesinger, *op.cit.*(1978), p.763. Steven Head, "The Other War: Counterinsurgency in Vietnam," in James S. Ol-

- son, *The Vietnam War: Handbook of the Literature and Research*. Westport, Conn.: Greenwood Press, 1993, p.127.
- (111) Taylor, *op.cit.*, p.200. John James MacDougall, "A Decision-Making Approach to Understanding American Policy-Makers," in Marc Jason Gilbert, ed., *The Vietnam War: Teaching Approaches and Resources*. New York: Greenwood Press, 1991, p.66. Colby, *op.cit.*, pp.106-7.
- (112) Komer, *op.cit.*, pp.69,147. Robert Komer, "Was There Another Way?" in W. Scott Thompson & Donaldson D. Fitzzell, eds., *The Lessons of Vietnam*, St. Lucia, Australia: Univ. of Queensland Press, 1977, p.213.
- (113) ノルンスタット前掲、四八頁。
- (114) George W. Ball, *Diplomacy for a Crowded World: An American Foreign Policy*. Boston: Little, Brown, 1976, p.47.
- (115) Kaiser, *op.cit.*, 224. ニーノン、前掲、上、三五七—九頁。
- (116) Westmoreland in Patrick J. Hearden, ed., *Vietnam: Four American Perspectives*. West Lafayette, Ind.: Purdue Univ. Press, 1990, p.42. Komer, *op.cit.*, p.48.
- (117) LeMay, *op.cit.*, p.123. Katenburg, *op.cit.*, p.161.
- (118) President's News Conference, July 17, 1963, *PPP 1963*, p. 569. Katenburg, *op.cit.*, pp.172-3.
- (119) Rusk in Airgram, DOS to All Diplomatic Posts CA-12341, May 3, NSF, 197, "Vietnam 5/1/63-5/17/63," JFKL, VNSF, 4-406. LeMay, *op.cit.*, p.246.
- (120) Hilsman, *op.cit.*, p.428. Ball, *op.cit.*, p.48. Sorensen, *op.cit.*, p.625.
- (121) Henry Cabot Lodge, *The Storm Has Many Eyes: A Personal Narrative*. New York: W.W. Norton, 1973, p.206.
- (122) 朝日新聞調査研究室『激動するインドシナ』朝日新聞社、一九六三年、九頁。
- (123) Memorandum, Rostow to Rusk, July 4, 1963, *FRUS*, 3, p.454.
- (124) Schwab, *op.cit.*, p.54.

- (125) Harkins in Memorandum by Heinz. May 6, 1963. *FRUS*, 3, p.267. Memorandum, Bagley to Taylor, Jan.17, 1963. *ibid.*, 3, p.31.
- (126) Naval Message, CINCPAC to JCS 092320Z, March 9, 1963. *DDRS*, R81E.
- (127) Hilsman, *op.cit.*, pp.439,533. Telegram, Saigon to DOS 734, Feb.8, 1963. *FRUS*, 3, p.109. Memorandum, Hilsman & Forrestal to President, Jan.25, 1963. *ibid.*, 3, p.52.
- (128) Rostow, *op.cit.*, p.289.
- (129) Minutes of Meeting of Special Group for Counterinsurgency, April 4, 1963. *FRUS*, 3, p.202. Memorandum, Jorden to Harri-man, March 20, 1963, *ibid.*, 3, p.167.
- (130) Address at Rice University, Sept.12, 1962. *PPP 1962*, p.669. Johnson, *op.cit.*, p.334.
- (131) Memorandum, Hilsman to Rusk, n.d.[April 1963]. *FRUS*, 3, p.191. 傍点は原文「タリミン」° Thompson in Memorandum of Conversation at White House, April 4, 1963. *ibid.*, 3, p.200.
- (132) McNamara, *op.cit.*, p.103.
- (133) Rust, *op.cit.*, pp.87-8. LeMay in Hilsman, *op.cit.*, pp.526-7.
- (134) Taylor in James William Gibson, *The Perfect War: Technowar in Vietnam*, Boston: Atlantic Monthly Press, 1986, p.78. Mecklin, *op.cit.*, pp.64-5,69. Hilsman, *op.cit.*, p.444. Iris Love, "Air Power," in Olson, *op.cit.*, 1993, p.172.
- (135) Hilsman, *op.cit.*, p.444. Talking Paper, Jan.21, 1963, NSF, 197, "Vietnam vol.X, 1/10/63-1/30/63," JFKL, VNSF, 4-225. Dept. of Defense News Release, Jan.5, 1963, NSF, 197, "Vietnam 1/1/63-1/9/63," JFKL, *ibid.*, 4-192.
- (136) Phillip B. Davidson, *Vietnam at War: The History 1946-1975*, Novato, Ca.:Presidio Press, 1988, pp.300-1. 「ハーネミッド」艦 掲「九一一」頁°
- (137) Halberstam, *op.cit.*, p.201. Davidson, *op.cit.*, p.301. Morrison, *op.cit.*, p.79.

- (138) Memorandum of Conversation at White House, April 4, 1963, *FRUS*, 3, p.199. ナハハ・ロー・ト森言持、石山昭男『よく
ナハ解放戦史』三書堂選書「一九七二年」一〇四頁。Herring, *op.cit.*, p.88.
- (139) Minutes of Meeting of Special Group for Counterinsurgency, April 4, 1963, *FRUS*, 3, p.202.
- (140) ナーナムド、通譯、五三頁。Harkins in Memorandum by Hilsman, Jan.2, 1963, *FRUS*, 3, p.13.
- (141) Cable, DOS to Saigon CA-10362, March 22, 1963, *ibid.*, 3, p.173-4,176. LeMay, *op.cit.*, p.233.
- (142) Telegram, Harkins to Felt MACJ100 1870, March 30, 1963, *FRUS*, 3, pp.186-7. Airgram, Saigon to DOS A-661, April 25,
1963, *ibid.*, 3, p.253.
- (143) Memorandum, Antlis to Harkins, March 30, 1963, *ibid.*, 3, p.189n.
- (144) Love in Olson, *op.cit.*, p.173. Telegram, Harkins to Felt MACJ100 1870, March 30, 1963, *FRUS*, 3, p.187.
- (145) Elliott, *op.cit.*, I, p.390. Harkins in Memorandum by Heinz, May 6, 1963, *FRUS*, 3, p.265.
- (146) Memorandum, Hilsman to Rusk, n.d.[April 1963], *ibid.*, 3, p.191.
- (147) Hilsman, *op.cit.*, p.443. Joes, *op.cit.*, p.58.
- (148) Schwab, *op.cit.*, p.43. Sam C. Sarkesian, *Unconventional Conflicts in a New Security Era: Lessons from Malaya and Vietnam*,
Westport, Conn.: Greenwood Press, 1993, p.9. Nagel, *op.cit.*, p.49.
- (149) Kennedy, *op.cit.*, p.172. *USVR*, 3, IV.B.2, pp.ii,18, IV.B.3, p.33.
- (150) Guenter Lewy, *America in Vietnam*, New York: Oxford Univ. Press, 1981(orig. 1978), p.258. ナハロー言録四〇〇〇平方
キールズ。
- (151) Memorandum, JCS to McNamara JCSM-302-63, April 17, 1963, *FRUS*, 3, p.230. Memorandum, Forrestal to President, April
22, 1963, *ibid.*, 3, p.246.
- (152) Memorandum Prepared in DOS, April 18, 1963, *ibid.*, 3, pp.237-8. Memorandum of Conversation at White House, April 4,

- 1963, *ibid.*, 3, p.199.
- (153) Kolko, *op.cit.*, p.145. Memorandum, Forrestal to Bundy, May 15, 1963, NSF, 197, "Vietnam 5/1/63-5/17/63," JFKL, VNSF, 4-420.
- (154) Mecklin, *op.cit.*, p.91. Thompson in Memorandum Prepared in DOS, April 18, 1963, *FRUS*, 3, p.242.
- (155) Johnson, *op.cit.*, p.334. ヤンソンヤンソン・C・ノットドリー (大前正臣訳) 『ケネディとの対話——その信念と栄光の軌跡』 徳間書店、一九七五年、一七七—八頁。 Gibson, *op.cit.*, p.78.
- (156) Nagl, *op.cit.*, pp.43,115. Kolko, *op.cit.*, p.144.
- (157) Herring, *op.cit.*, p.87.
- (158) シーノン、前掲、上、三三八—九頁。
- (159) Ball, *op.cit.*, p.53. McNamara, *op.cit.*, p.322.
- (160) Sorensen, *op.cit.*, p.632. Letter, Bowles to Bundy, July 19, 1963, *FRUS*, 3, p.520.
- (161) Memorandum, Hilsman to Rusk, n.d.[April 1963], *ibid.*, 3, p.189.
- (162) Nagl, *op.cit.*, p.132. Herring, *op.cit.*, p.86.
- (163) Catton, *op.cit.*, p.19.
- (164) ノーナル、前掲、一〇四頁。 Thompson, *op.cit.* (1969), p.125. Nolting, *op.cit.*, p.62.
- (165) W.W. Rostow, *View from the Seventh Floor*. New York: Harper & Row, 1964, p.119.
- (166) Research Memorandum RFE-58, July 1, 1963, *FRUS*, 3, p.440.
- (167) Mecklin, *op.cit.*, p.312. Schlesinger in *Causes, Origins, and Lessons of the Vietnam War*, p.138.
- (168) McNamara, *op.cit.*, p.32. Komer, *op.cit.*, p.1.
- (169) Katzenburg, *op.cit.* (1971), p.829. Schlesinger, *op.cit.* (1979), p.763. Komer, *op.cit.*, p.10.

- (170) McNamara, *op.cit.*, p.322. McNamara, et al., *op.cit.*, p.385.
- (171) Memorandum, Mecklin to Murrow, Sept.10, 1963, *FRUS*, 4, p.150. Ball, *op.cit.*, p.50.
- (172) Thomas C. Thayer, "Patterns of the French and American Experience in Vietnam," in Thompson & Frizzell, *op.cit.*, p.22.
- (173) Broadcast of Interview with Cronkite (CBS News), Sept.2, 1963, *PPP 1963*, p.652.
- (174) Mecklin, *op.cit.*, p.25.
- (175) Hilsman, *op.cit.*, p.512. McNamara, *op.cit.*, p.xvi.

〔本論文は文部科学省科学研究費補助金・基盤研究（C）（2）「ゴ・ジン・ジェム政権崩壊に見るアメリカⅡ南ベトナム関係としてのベトナム戦争」（平成一五〜一八年度）および基盤研究（A）（1）「アメリカの戦争と世界秩序形成に関する総合的研究」（平成二六〜一八年度）による成果の一部である〕